第５学年「てつがく創造活動」学習活動案　　授業者　野萩 孝昌（構想部会）・神谷 潤・藤枝 真奈・山賀 愛

日　時　2021 年６月 29 日（火）特設５校時（13：15～14：15）

活動場所　５年教室　校庭　畑　スタジオ　体育館　ピロティ　高学年屋上階段 など

１　活動名　　めぶくプロジェクト

２　活動について

第５学年の子どもたちは，３・４年生時に「自学」（個）と「創造活動」（学年活動）に取り組んできたという学びの履歴をもっている。個の興味から立ち上がる「プロジェクト型」活動は２年生以来である。

４月２週目頃まで，昨年度実行することができなかった「逃走中」について話されていった。「何としてでもやりたい！」という元実行委員や，「やるって決めたことだから，とりあえず…」，「やるならやれば？」，「もうやらなくてもよくない？」などといった意見が挙げられ，「逃走中」に対する温度差が明るみになった。

学年の教員たちは，これらの姿からめぶく学年の子どもたちはてつがく創造活動を「学年全員で一つのことをするもの」，「意見はまとめて一つにする」，「決まったことはやらなくては」と捉えていると感じた。そこで，「必ずしも‘全員が’やりたいことではない」ことを「多数決」で決めることや「責任感とは違う，何かプレッシャー・同調圧力的なもの」とも捉えられるような子どもたちがもっている「てつがく創造活動」の概念を壊すことも必要だと教員は感じた。そこで４月３週目に教員から「自分がやりたいことをやろう！」と促した。現在進行中のてつがく創造活動（プロジェクト）がスタートした経緯は以上のとおりである。

「好きなことやってもいいの？」と戸惑いながら始まった子どもたちだったが，２年時の「えらぶ（プロジェクト）」の経験が想起され，各々がおもむろに動き出した。メンバー構成は学級で閉じているグループが多いが，野球やピタゴラスイッチなど異クラスが混在しているところや，けん玉やマジックなど，（ほぼ）一人で取り組んでいる児童もいる。

プロジェクトを進めるにあたり，活動を計画して，課題や現在の進捗状況を明確にし，ふり返り，ゴールに向けて次にどうつなげていくのかといった，自分たちの学び・活動の履歴を可視化するためにも「計画表」を用いて取り組んでいる。計画表はファミリーで見合うようにしているが，基本的には「個のドキュメンテーション」と捉えられる。一方で，子どもたちの姿を見ていると，自分たちの活動のみに終始しており，他のグループとのかかわりが薄い。そこで「興味の複合」のきっかけの一つとして，グループごとの活動履歴等を示した「ポスター」（開かれたドキュメンテーション）を作成することにした。教師の見とりでまとめていくのではなく，子どもたち自身で学び・気づき・変化等を可視化して，意味づけができるように教師はポスターのパーツ（プロジェクトが立ち上がった理由・活動内容・写真・これまでのふり返り・これからの展望）を示すだけとした。これまであまり他のプロジェクトには関心を示していなかったのは，「そもそも知らなかったから」という面もある。最近では他チーム（野球やけん玉，マジックなど）に触発されて「体験参加」，「モノマネ」などが行われているが，中には「見せたい」「教えたい・知ってほしい」から，自分たちで呼び掛けたり，宣伝したりして休み時間などにミニ発表会を開いているが，なかなか「人が集まらない（規模が小さい）」と嘆く姿が見られた。そこでその子どもたちからめぶく委員に，「（中間）発表会」（発表ができる日）の提案があり，３回の発表日が設定された。

３　これまでの学びの履歴とゴールまでの見通し

（１）概要

第１次　「てつがく創造活動」何したい？

・逃走中　　・てつがく創造活動のイメージの共有　「それ，本当にやりたい（やりたかった）こと？」

第２次　「やりたいことをやる」

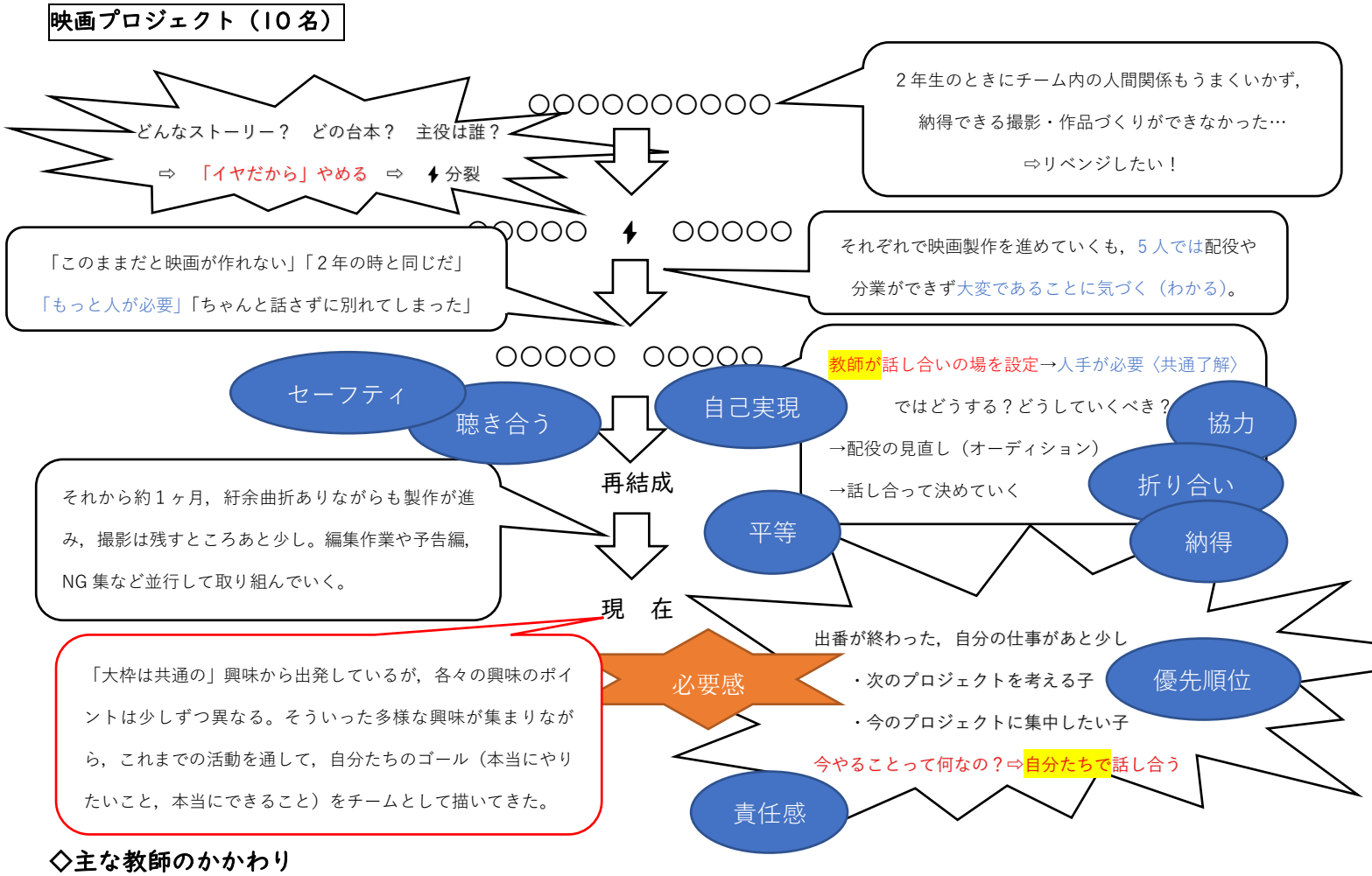
・自分の興味→プロジェクト　　・計画表（ゴールの設定）　　・ポスター

・てつがく:「やりたいことをやる」って？（ルール）／「あそび」と「まなび」／グループ内のズレ

第３次　（中間）発表会　　※２学期以降は引き続き検討していく

（２）子どもの姿

活動当初はプロジェクトの「掛け持ち」が多く，簡単に「鞍替え」していく子どもが目立った。また活動していく中で不和や思い通りにいかないことがあると，立ち止まって改善策を話し合うというよりも，自分の興味より環境や人間関係を優先して，衝突を避ける傾向にあった。以下，「映画プロジェクト」（裏面 No.８）の事例を挙げる。



◇主な教師のかかわり

・一人ひとりの計画表や連絡帳の記述にコメントし，記述の内容によってはグループと教師とで話し合いの場（教師のみとり⇄子どもの想い）を適宜設ける。（想いのズレの顕在化，ゴールまでの見通し・問い直しなど）

・活動中は安心・安全な環境づくりに留意し，活動後は教師や子どものカメラで撮影した写真をもとに，そのときそこで何が起きていたのか，誰が何を考えていたのかなどを訊く。

４　部会の課題

てつがく創造活動でのリゾーム型の学びとは，どのようなものなのか。まず大切にしたいことは，「子どもたちがそれぞれ，自分の興味がある（もしくは興味をもった）ことに取り組んでいる」ことである。これは，就学前教育でいえば，砂場や積み木で遊ぶ，足下を通った虫を追いかけるなど，自分が今したいこと（と欲求）に素直に従いながら，没頭し，熱中している様子である。本校では，そうした就学前教育で育まれてきた「したいことに没頭する」ことができる時間と場所を大切にするなど，就学前教育からのボトムアップをめざして，低学年教育を構想してきた。これを更に６年生に向けてボトムアップすることが，てつがく創造活動でめざす「学びをあむ」姿であり，そのキーワードとして「興味の複合」と「リゾーム型の学び」を構想部会で提案してきた。

「子どもたちが自分の興味があることに取り組めること」がリゾーム型の学びにつながるのだが，それは大きく分けると二つの場面で見てとれる。一つは，学級（や学年）などの大きな集団での興味の異なりからである。子どもたちが主体的に取り組む環境であるとき，興味をもつものが異なってくるのは当然のことであり，それが認められ，その個々の探究を他者に開いていく場を設定し，互いの探究を見あう場面で，個々の興味が複合しているのである。もう一つは，同じ興味であると子どもたちが思い，一緒に探究していく中で，少しずつ異なりを感じ，それをすりあわせていく場面でも，やはり興味が複合しているのである。

個々の興味から出発し，その興味の異なりやズレが現れ，それを何とかすりあわせようとしたり，出会ったりする場面で興味が複合していく。こうした学びが，リゾーム型の学びであると考えている。

◇参観，協議の視点

子どもの活動に伴走する教員として，どう子どもたちをみとり，支援ができるか。